書　評

宮野真生子著
『出逢いのあわい――九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』
（堀之内出版、2019年）

古田　徹也

選択と邂逅
――宮野真生子『出逢いのあわい』をめぐって――

1. 九鬼哲学とその文脈を見渡す重要な研究

宮野真生子著『出逢いのあわい――九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』（堀之内出版、2019年9月）は、彼女の博士論文「個体性と邂逅の倫理――九鬼哲学の射程」が書籍化されたものである。（彼女はこの論文により、2019年3月に博士（人間科学）の学位を大阪大学より授与された。）また、本書は、『急に具合が悪くなる』（磯野真穂との共著、晶文社、2019年9月）とともに、彼女の遺著である。彼女は両著書の刊行を前に、7月22日、癌のため42歳の若さで亡くなった。

宮野は二十年近くずっと九鬼周造の著作を追い続けてきた。なぜ、それだけの年月が必要なのか、なぜ九鬼の思考を掴むのは難しいのか、その理由はいくつか挙げられる。まずもって、「偶然性」という捉えがたい主題が彼の哲学の中心にある、という点が大きいが、そのことには尽くされない。九鬼はおよそ七年間の長きにわたりヨーロッパに留学し、リッケルト、ベルクソン、フッサール、オスカー・ベッカー、ハイデガーらに学んだほか、サルトルとも親交を結んでいる。西洋哲学の当時最新の潮流を、九鬼ほど幅広く、鮮烈なかたちで、しかも深い理解ともに受容した日本の哲学者は他にまずいない。九鬼哲学の生成過程が西洋哲学のそうした甚大な影響抜きには語れない以上、九鬼を研究する者は、西洋哲学全体の流れを視野に入れつつ、彼が直接吸収した当時の新カント派や現象学などの展開を十分に踏まえる必要がある。

それだけではない。九鬼が留学時代以外は日本で生活を送り、日本の大学で研究と教育を行った人物だということも、当然忘れてはならない。前世代や同世代の日本人哲学者から彼が受けた影響や、彼が見つめた日本の伝統的な文化や言語、その変化といったものも、彼の哲学を解明するうえで向き合うべき必須の要素なのである。

宮野は本書において、こうした困難な条件に見事に応えている。たとえば、本書の第一章、第三章、第五章はそれぞれ、新カント派（特にヴィンデルバント）、ハルトマン、そしてハイデガーの議論が取り上げられ、その各々と九鬼の議論との関係が丁寧に解きほぐされている。九鬼に関する先行研究を見渡すと、新カント派からの影響は九鬼にとって一時的なものだったと軽視するものが多く、また、ハルトマンの存在論との比較も手薄だった。宮野は、九鬼の著書や草稿などを幅広くおさえつつ、彼がヴィンデルバント等から何を継承し、どこでわかれるのかを詳しく、かつ有機的な流れの下に跡づけている。それによって、九鬼の問題関心が「存在論理学」なる独自の方法論として結実する過程を浮き彫りにすることに成功している。

さらに宮野は、続く第六章と第七章において田辺元の哲学を取り上げ、田辺と九鬼との間で交わされた往復書簡という珍しい素材も繙きながら、九鬼が田辺からの批判に応えて自身の思考をどう練り直し、『偶然性の問題』においてどのような偶然性の形を提示したのかを明らかにしている。そのうえで、第八章で宮野は今度は和辻哲郎の倫理学との比較を行い、九鬼が和辻の存在概念――「がある」と「である」など――を参照しつつ展開している実存論の内実を探っている。そして同章の終盤では、和辻との交差という視角の下で九鬼の「倫理学」がどう輪郭づけられうるのか、その可能性を論じるに至っている。

こうして宮野は、西洋と日本のどちらの文脈にも偏ることなく、そして、どちらの文脈においても新たな研究成果をもたらしつつ、九鬼哲学の成り立ちと内実、そしてその可能性を明らかにする、極めて重要な仕事を成し遂げた。

2. 『急に具合が悪くなる』との関係の下に本書を読む

九鬼が、西洋と日本の哲学者たちの議論とそれぞれどう切り結び、全体としてどのような重層的

な思考を形成したのか。それは、本書で宮野が提起した描像に対して、九鬼の研究者が――また、新カント派やハイデガー、田辺、和辻等々の研究者が――それぞれ検討して応答していくべきだろう。私も本来ならこの書評で、西洋哲学の研究者の一人として、あるいは、和辻の倫理学に比較的親しんでいる者の一人として、その種の検討作業に幾ばくかの貢献をすべきなのかもしれない。

しかし、この書評では、専ら『急に具合が悪くなる』の内容と絡めるかたちで本書を扱っていくことにしたい。それはひとつには、宮野真生子という人が亡くなってしまい、その二ヶ月後に本書と『急に具合が悪くなる』が同時に出た、というその事実から私がいまだ距離を取れないことによる。私は少なくともいまは、この事実を抜きに本書を読むことができない。『急に具合が悪くなる』という稀有な本が現実に出版された以上、その影響の下で本書を見つめざるをえない。

ただし、本書を読み解くうえで『急に具合が悪くなる』に着目する理由は、そうしたタイミングや個人的感情だけではない。『急に具合が悪くなる』は、病状が悪化していく宮野が人類学者の磯野真穂と交わした往復書簡が書籍化されたものだが、この本は同時に、本書『出逢いのあわい』と内容面で深い相互的な関係にある。『急に具合が悪くなる』で宮野が述べる哲学的内容の多くは、『出逢いのあわい』で自身が展開した理論が屋台骨になっている。他方で、『急に具合が悪くなる』は、『出逢いのあわい』にいわば批判的に応答し、さらなる思考の展開を見せる側面も有している。少なくとも、私にはそう思われる。以下の限られた紙幅では、『出逢いのあわい』で示された論点とその先に見えるものについて素描を試みることにしたい。（なお、以下では便宜上、『出逢いのあわい』を『出逢い』と略し、『急に具合が悪くなる』の方は『急に』と略して表記する。）

3. 偶然性とは何か

真理の探究が哲学の目的ならば、その営みはたとえば、現実をあるがままに捉えることとして理解することもできるだろう。そして、その営みの難しさは、いま目の前に広がっている光景をよく見たり精密に記述したりするだけでは「現実をあるがままに捉える」ことにはならない、という点に端的にあらわれている。宮野は『出逢い』の冒頭近くでこう述べている。

> ……現実とは多様で動的であり、単に目の前で起こっている事象を直接感じるだけでは、あるいは具体的に記述するだけでは、現実を捉えることはできない……。私が生きる現実は、私を超えたものとの関わりのうちにある。（『出逢い』7）

そして、ここで「私を超えたもの」と呼ばれているのが、まさに偶然性であり、偶然性を成立させるものであり、偶然性が開くものにほかならない。

では、偶然性とは何か。宮野によれば九鬼は、偶然性を「存在と無の接点」（同70）、あるいは、「有が無の中にくい入っていること」、「無が有の領域を侵していること」（同92）として捉えている。すなわち、「ないことも可能であるにもかかわらず、ある」（同70）というあり方が、偶然性の内実だという。

したがって偶然性の成立には、その前提として、人間の知性の働きが不可欠ということになる。なぜなら、九鬼による偶然性の定義に従うならば、いま生じたことが何ほどか意外であるという驚きにおいて、偶然性が成立することになるからだ。すなわち、いま生じたこととは別の可能性も事前にあれこれ想定していたということが、偶然性の成立の前提条件となるのである。

そして、このことは同時に、偶然性がある種の驚きの感情と分かち難い関係にあるという点も浮かび上がらせる。九鬼が強調するのは、〈別様でもありえたのに、こうなった〉、〈他のことが生じる無数の可能性があったのに、なぜかこれが生じた〉という驚きの感情は、「人間の生きる現実が知性と感情の間で形成される」（同38）ということを如実に示すものだ、ということである。以上の点を九鬼に拠りつつまとめる宮野の叙述を見ておこう。

〔普遍と特殊に〕引き裂かれた存在としての

> 人間は、知性をもって形而上を見通そうとするゆえに、「現実の世界が存在するという偶然の事実そのものに驚きを感じないではいられない」存在であり、そこに開かれている何等かの「超感性的なものの深遠」に「飛び込んで」しまう傾向をもっている……。（同65）

知性をもつ存在として人間は、世界を常に何らかの筋道に基づいて、合理的に理解しようとする営みをやめられない。言い換えれば、世界のあり方に必然性を求めないではいられない。しかし、まさにそれゆえに、世界が偶然性の様相の下にあらわれうる。この点を宮野は、『急に』においてより平明なかたちで描き取っている。

> 知性をもって合理的に生きようとする私たちは精いっぱい必然性を求め、流れる時間のなかで変わってゆく世界を統御しようとします。そして、人生を安定させたいと願います。そうやって人は進歩し、社会を形作ってきたのです。
>
> そして、皮肉なことにというか、おもしろいことにというか、こうした合理性に基づく知性を持つからこそ、人間は、偶然性に気づくことができます。だって、原因を追及し、なんでだろう、これからどうなるだろうと筋道を求めるからこそ、そこから外れたものを見つけることができるのではないですか？……「こうなるはずだ」という必然性の予測がなければ、「こんなことありえない」と偶然性に驚くことができない。（『急に』94）

また、『急に』では、偶然性の概念が次のようにまとめられてもいる。

> ……確率はあくまでも客観的な可能性の話です。それに対し、偶然性はその可能性が「この私」に降りかかってきたという「遭遇／邂逅／出会い」、「今その時」の衝撃を表す概念です。（同112）

4. 現実の生産点としての偶然性

宮野にとって――そして、彼女の解釈する九鬼にとって――、「偶然性」とは、知性をもって未来を計る者のみが受ける衝撃を表す概念である。そして、そのように立ち現れる偶然性を、宮野はさらに、「現実の生産点」（『出逢い』166）として位置づける。すなわち、「偶然性が現実の基礎にある」（同）と主張するのである。

我々が現在から未来を見遣るとき、その未来はいかに多様なものであろうとも、（当たり前だが）我々に予測されており、我々にとって意味づけられている。また、過去もすべて、現在から我々によって回想され、意味づけられたものである。その一方で、「現在という刹那において生成する偶然は、まさにその瞬間に創造されるものゆえ、人間の意味づけが届かないものである」（同188）。そして、そうであるからこそ、まだ予測も回想も意味づけもされていない新たな可能性が、現在という刹那の一点からはじめて産み出されうるという。

ここには、ある種の循環的な構造が見て取れる。未来を計る者のみに、計り知れない偶然の出来事が現在においてもたらされる。そして、その偶然事こそが、そこから未来を計るよう促す。その意味では、偶然性とは、人間がせっかく構築しようと努力してきた安定した世界――いわば、安全な家屋――を打ち壊し、無に投げ込むだけのものではない。人間は再び、そこから家を構築しないではいられない。たとえそれが、また偶然性に打ち壊される仮小屋のようなものに過ぎなくとも。――宮野は次のように述べている。

> たしかに無に投げ込まれた存在が人間である。だが、それは「無の深淵の上に壊れ易い仮小屋を建てて住んでいる人間たち」であり、論理を働かせながら「仮小屋」を建てて生きていくしかない。（同204）

宮野と九鬼に従うなら、現実とは、「仮小屋」の破壊と構築という絶え間ない運動におけるどの一局面のことでもなく、むしろそうした一連の運動そのものだということになるだろう。というの

も、先に引いた通り、「現実とは多様で動的」であり、「私が生きる現実は、私を超えたものとの関わりのうちにある」とされるからだ。

5. 仮小屋の二通りの建て方

そして、ここに至って宮野が踏み入れるのは、また、彼女が九鬼から引きだそうとするのは、「仮小屋」をどう建てるべきかという、倫理的な次元の問題である。

一方には次のような建て方がある。確率を重視し、統計の手法も用いて、合理的に未来を予測し、リスクを管理して選択してきたつもりだったが、想定外の出来事に襲われた。これを教訓に、世界の完全な統御を目指して、より精確な予測と選択を行っていこう――このような方針に則った建て方である。しかし、これでは、偶然性というものは予測の改良を促す消極的な役割しか果たしておらず、世界の必然的なあり方を私が十分に捉え損なっていた、ということと何ら変わりがないことになる。

これに対して宮野は、偶然性が積極的な役割を果たすような建て方を模索していると思われる。それは、言うなれば偶然に従い、偶然を受け止めるような仕方で仮小屋を建てていく、というものである。その内実を宮野は、「変容的な経験」や「変容的な選択」というものを手掛かりに輪郭づけようと試みている。

変容的な経験とは、経験するまでそれが何か明確にはわからないが、その経験によって当人が変容するような経験のことだ。したがって、そうした経験を選択するというのは、「不確定性、すなわち偶然性を許容する行為」(同259)だと言える。ただし、そのような選択は全く不合理な破れかぶれの行為というわけでもない。というのも、我々は多かれ少なかれ、日々の生活において「関連状態に付与すべき確率がわかりえないのに、とにかく選択をしなければならない」(同256)状況に置かれているからだ。「私たちは先がわからないなかで、それが合理的な判断なのかどうかわからないまま、何かを選びとらざるをえない」(同179)のである。

むしろ、宮野によれば、「選択に対峙し俯瞰する完成した自己という捉え方自体に問題がある」(同260)。「選択には偶然や不確定性がつきもので、これらを含んだところでしか選択はできない」(同)ということだ。我々はしばしば、選択を行ったその先において、自分とその生き方を発見する。その意味で選択とは、すでに先が完全に分かっているいくつかのルートのなかから一つを選ぶことではなく、新しく無数に開かれた可能性の全体に入っていくことだとも言える。仮小屋の建て方として宮野が模索するのは、選択というもののこうした性格を直視し、選択がそれ自体として自己形成と自己発見のプロセスであることに自覚的になる、ということを少なくとも意味するだろう。

6. 美しく整った物語とは別の仕方で

しかし、こうした議論の筋道に対しては、『急に』において宮野自身が自己批判的に疑問を呈していると思われる箇所がある。そこで彼女は、リスクを管理して未来を選択する合理的な責任主体とは異なる、偶然を受け止める仕方で「仮小屋」を建てる主体のあり方について、次のように評するのである。

> 不幸に怒り、偶然の今に身を委ね、自分の人生を引き受け、形作ってゆく。そんな美しく整った物語を語ることで見えなくなってしまうことはないのか。(『急に』134)

「偶然の今に身を委ね、自分の人生を引き受け、形作ってゆく」そのあり方がそれ自体、なおも「美しく整った物語」になってしまう要因を、宮野は「書き言葉というものの宿命」(同)に見ようとしている。自分の来し方や行く先を書こうとすれば、それはどうしても「一本の筋をたどろうとし、『一貫性』を求める傾向」(同)をもつ。そう考える宮野は、むしろ「余分なものだらけ」(同135)の話し言葉、一貫性をもたず分散し分岐し続ける会話的な語りの展開のうちに、美しく整わないかたちで自分を自分として輪郭づける「仮小屋」の建て方を見出そうとしている、そう思われる。

7. 選択とは何か

この論点は非常に興味深く、さらに掘り下げて検討する必要があるが、紙幅が限られた本稿では、関連する別の重要な問題も確認しておくことにしたい。それはすなわち、自己形成と自己発見のプロセスとして「選択」というものを捉えることは、あくまでも「選択」という行為の捉え方（行為の解釈）の話であって、選択そのものではないのではないか、という問題である。

もしもこの疑問が当たっているとすれば、宮野が推奨するかたちの「選択」とは実のところどういうものなのだろうか。偶然に従うという選択とは、そもそも選択なのだろうか。それは、目を瞑って木材に釘を打ち込んでいくことと、どこが違うのだろうか。そんなやり方ではそもそも仮小屋すら建たないのではないか。

以上の疑問に関して、『出逢い』のなかで宮野が十分な回答を示しているとは思われない。また、九鬼の著作から有効な手掛かりを引き出しているとも思われない。むしろ、ここで注目すべきなのは、宮野が『出逢い』ではなく『急に』のなかで展開している議論である。

そこで宮野は、現代社会において当然視されている「選択」の標準的なモデルはそもそも「選択」になっているのか、と疑問を提起している。

> 現代社会において合理的に選択しろ、というとき、その意思はエビデンスを理解し、リスクとベネフィットを計算したうえで導き出されるものであることを想定しているように思います。意思は可能性とデータを見れば、自動的にあるいは論理的に生まれてくる〔というわけです。〕（『急に』73）

このようなプロセスの結果としての帰結は、完全に合理的（論理的）な選択ができる者ならば皆同じものになるだろう。（先ほどの比喩を用いるなら、皆が同じ家屋を建てることになるだろう。）しかし、不完全で不合理な存在者である我々人間に、そのような合理的な選択は可能なのだろうか。むしろ、考慮すべき無数の要因、無数の可能性を前に、選択するどころか身動きがとれなくなってしまうことが多いのではないか。そして、それ以前に、帰結が「自動的にあるいは論理的に生まれてくる」ことを、我々はそもそも「選択」と呼べるのだろうか。宮野は言う。「合理的に比較検討することはできるけど、私たちは本当に合理的に『選ぶ』ことなんてできるのだろうか、そんなふうに『選ぶ』ことが『選ぶ』ということなのだろうか」（同51）。

実際に宮野は、末期の癌に蝕まれるなか、「合理的な選択」という幻影によって疲弊していた。有効な治療法やケアなどにまつわる膨大な可能性のなかから「合理的な選択」を行い続けるべしという、ある意味では常識的な規範に、ひどく苦しめられていた。さらに、この規範の遵守は宮野を孤独にした。なぜなら、「合理的な選択」に他者の存在や他者とのかかわりは必要なく、ときに障害にすらなるからだ。周囲の雑音をシャットアウトし、他者の意見に依存せず、客観的なデータと論理のみに従って自ら比較考量を行い、最適解を選び続けなければならない。「結果、私は孤独になってゆきました。これが『良い患者』の姿です」（同70）。

そうしたなか、宮野は自分が長く住んでいた京都に帰りたくなり、その気持ちに素直に従ってみた。そこに「『選んだ』とか『決めた』という感覚はほとんどありませんでした。ただもう勝手に動いてしまった、という感じです」（同50）。

> ところが、そうやってほぼ無計画に戻ってきた京都で私はある病院と出会い、今後のケアの方向性が形作られてゆくことになりました。それは、複数の選択肢を比べて合理的に決定したのではなく、たまたまの「出会い」をもとに「こうしよう」という気持ちが自然に湧いてきた結果でした。だから、形作られてゆくことに「なりました」と私は書いたのです。私が選び、決めたという能動的な行為というよりも、その病院の先生や看護師さんの雰囲気が身体になじみ、腑に落ちて、「じゃあお願いします」という言葉がほとんど考えなしに出てきました。（同50）

この経験を基に、選択とは何かについて宮野は次のように思考を紡ぐ。「……選ぶとは能動的に何かをするというよりも、ある状態にたどりつき、落ち着くような、なじむような状態で、それは合理的な知性の働きというよりも快適さや懐かしさといった身体感覚に近いのではないか、そして身体感覚である以上、自分ではいかんともしがたい受動的な側面があるのではないか」（同51）と。

緩和ケアの方向性を選ぶという、当時の宮野にとっておそらく最も重要な選択のひとつは、「京都という私になじんだこの土地と、そこでもたらされたひとつの出会い」によってもたらされた。腑に落ちるもの、自然になじむもの、落ち着くもの、というかたちで形作られた。そして、実はそもそも選択とはそういうものなのではないか、と宮野は洞察するのである。

8. 他者への余白

「選択」というものを、このように能動性と受動性のあわいに位置づけ直したとき、『出逢い』の後半で宮野が九鬼に拠りつつ、偶然性を根源的社会性として読み替えていく論点（『出逢い』第三部）にも、より明確な光を当てることができるだろう。宮野と九鬼は、偶然性という「遭遇／邂逅／出会い」の本質を、計られた可能性と計り知れない出来事との衝突ではなく、まさに他者とのかかわりの契機として捉えていく。上述の「選択」概念の捉え直しは、その方向性を支持して補強する意味をもちうるだろう。

ただし、偶然性の概念の根幹にはじめから他者との邂逅を織り込むには、なお埋めるべき間隙があるように思われる。もちろん、我々の生において、偶然事の生起にも選択の営みにも、他者との出会いと交わりが事実として決定的に重要な役割を果たしていることは間違いない。しかし、原理的（本質的）に不可欠とまで言えるのだろうか。

いま見た通り、受動的な側面をもった選択として宮野が描き取った消息においても、そこには「京都という私になじんだこの土地」（『急に』51）というものがかかわっていた。では、「この土地」には他者も必然的に織り込まれているのだろうか。ある土地が、他者抜きに私になじんでいることもありうるのではないか。そして、その土地自体があらためて私と出会うことも、少なくとも原理的にはありうるのではないか。

そのように問うたなら、宮野はどう答えてくれるだろう。他者抜きの土地などありえない、と言うだろうか。土地もまた他者である、と言うだろうか。それとも、また違う答えを示すだろうか。もう当人から応答を得られないのは寂しいが、そのようにただ嘆いていることこそ、「遇うて空しく過ぐ」ことの最たるものだろう。宮野自身が、『出逢い』の議論の先に最期まで新たな思考の可能性を追い続けたように、我々もまた、彼女と彼女の著作との邂逅を「現実の生産点」として、ここから広がる可能性を様々なかたちで求めていく。そうしなければならない。